
コナン×歩美 物語

執筆復帰のカサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナン×歩美 物語

【Nコード】

N6699R

【作者名】

執筆復帰のカサキ

【あらすじ】

コナンは蘭と性格の似た歩美に次第に惹かれていくようになり、蘭のことを忘れていきます。しかし、蘭はコナンが新一であることに気づき、密かに歩美との恋を応援します

プロローグ

江戸川コナンと吉田歩美の2人の男女が恋に落ちて行く物語で、江戸川コナンこと工藤新一は次第に幼なじみの毛利蘭のことを忘れていき、吉田歩美という毛利蘭似た少女に惚れて行きます

毛利蘭は江戸川コナンが工藤新一であると事件の時の行動力と推理力ですでに正体を知られていることを江戸川コナンこと工藤新一は知らないまま過ごしていた

灰原哀はこの物語には出て来ない

そのため、戻ることもなく、そのまま生活を送るようになる

江戸川コナンと吉田歩美の2人は最初、吉田歩美が一方的に江戸川コナンに好意を寄せているような行動を取り、それに対して江戸川コナンは毛利蘭以外の女性には冷たい態度を取り続けていた

しかし、江戸川コナンも月日が流れていく内に吉田歩美の明るさや誰とでも、話すことや接する姿が幼なじみの毛利蘭に似ていることを知り、次第に吉田歩美に惹かれていくようになった

この2人の物語が今ここに始まる

第1部・第1話 転校生

帝丹小学校は入学式があった日から約2ヶ月が過ぎていて、1年生はようやく小学校生活に慣れてきた頃で、次第に友達や上級生と一緒に遊んだりしていた

その中で、吉田歩美・円谷光彦・小嶋元太の3人は常に一緒に行動を共にしており、仲良く遊んだり勉強に励んでいた

そんなある日の朝、学校内の1年生のあたりでなにやら上級生が話をしていた

「今日、1年生のクラスに転校生が来るみたいだな？」

「そうだな、でも1年生に転校生ってあまり聞かんよな？」

「ああ、それもそうだな？」

「ああ」

3人はさっきの上級生の会話が気になっていたが、チャイムが鳴り教室に戻った

そして、チャイムが鳴り終わったあとに、担任が入ってきて、朝のHRが行われている

「みなさん、おはようございます！」

「先生、おはようございます！」

朝の挨拶を終えると、担任はさつき廊下で上級生が話をしていた転校生の事を話して、転校生を教室に呼んだ

「さあ、入ってきて」

ガラガラ ガラガラバン！

転校生が入ってきてても、1年生のためにあまり理解できてない人がかなりおり、ほとんどの人がポカーンとしていた

「さあ、みんなに挨拶をしてください」

「はい、この度この帝丹小学校に転校生して来ました江戸川コナンと言います。よろしくお願いします」

パチパチ！

「それでは、コナン君は一番後ろの窓際の机が空いているのでそちらに座ってください」

「はい、分かりました」

コナンは一番後ろの席に座ると、右隣に座っていた、吉田歩美が声を掛けてきた

「おはよう」

「おはよう」

「私は吉田歩美だよ？よろしくねえ」

「俺はさっき言った江戸川コナン、よろしく」

2人はこの隣の席から、だんだんと恋の始まりを告げるには早いが、

その前段階と言える

第1部・第2話 探偵団結成

コナンが転入して3日がたった日に歩美・光彦・元太の3人がコナンを遊びに誘ったが、コナンが断ろうとしたため光彦・元太の2人がコナンに詰めよい、歩美のことを引き合いに出したため仕方なく引き受けることになってしまった

「コナン、なにしてんだ？」

「えっ？」

「コナン君、なにを見てるんですか？」

「いや、なんでもないよ」

「あー、コナン君手になに持ってるの？」

「これは、誰かの忘れ物みたいだな」

コナンが紙切れを手に持っていると、3人が声をかけてきた

コナンは少し戸惑ったが紙切れのことを話した

3人は紙切れを覗き込むと、暗号みたいな訳の分からない文字が書いてあり、3人は真剣に考えたがなかなか上手く行かずに投げ出そうとしていた（元太のみ）

内容は歩美や元太には難しい物だったが、光彦に取ってもなかなか答えが出せなかった

しかし、コナンはいとも簡単に解き明かして歩美達は喜んでいたので後に持ち主の人が見つかり、一件落ち着いたと思いきや元太があることを言った

「まあ、みんな俺達って人の役に立つことをしたんだよね？」

「ええ、そうですね」

「うん！そっだよな、コナン君？」

「えっ？ああ」

コナンは不意をつかれたように間抜けな返事をしてしまった
それに関わらず、元太は続けた

「ならば、これから俺達は少年探偵団を結成しようぜ！」

「あっ、いいですね元太君！」

「うん！楽しそうかも！」

「だろ？だから、今日から少年探偵団の始まりだぜ！」

「「おー！」」

光彦と歩美は声をそろえて賛同したが、コナンは自分は巻き込まれ
なくてよかったと思った

しかし、この後に巻き込まれていたことに気づき、この3人にやら
れたと思った

第1部・第3話 夏休みの計画

探偵団結成後事件が起きる度にコナンの力が発揮されていくにつれて、歩美に変化が見え始めてきたことに元太と光彦はコナンに嫉妬じみた視線を向けるがまったく気にしないで過ごしていた

夏休み前の最後の日に3人はコナンと一緒に阿笠博士の家に行き、夏休みの予定を立てることにした

「「博士、お邪魔します！」」

「おお、よく来たのう」

「うん！博士の家で夏休みにみんなで何をするか決めるためにきたの」

「いいよな、博士？」

「いいですよね、博士？」

「ああ、ワシは構わんよ」

「「やったー！」」

3人は喜びをあらわにさせたが、コナンのみ呆れていた

「新一は歩美君達とは遊ばないのなの？」

「ああ、子供に付き合ってる暇はないよ」

「って、新一も今は子供だろうが？」

「あれ？そうだったか？」

「そうじゃろう？」

「あはは」

歩美達3人はコナン抜きに次々に行きたい場所ややりたいことを上げていった

中には歩美がコナンと2人つきりで何かをしたいと言うと光彦と元太が必死にやめさせようと言うのだから、歩美に押されてしまい2人つきりの計画も追加されてしまったがコナンは博士と話してばかりいたため、歩美がコナンの腕に抱きつき2人の所へ引っぱった

「コナン君、さっそくガールフレンドが出来たのう?」

「こら、博士!」

「ふふ」

博士は歩美の行動の意味を知っていたが、コナンにとっては「蘭」が意中の相手のため、冷たい態度や傷つけることしか取れなかったしかし、光彦と元太はコナンに対する嫉妬心はあるが、女の子に対する態度が冷たいことに怒りを覚えていることをまだコナン本人は知らなかった

話は逸れたが、夏休みの計画の案が複数挙がり博士も含めて最終決定をする事を思いついた

計画案

- 1 キャンプをする
 - 2 海水浴に行く
 - 3 歩美家に泊まる
 - 4 博士の家に泊まる
 - 5 勉強会をする
- などがあがり、5人で決めることにコナンは仕方なく付き合うことになった

その後、5人は反発をしながら夜遅くまでかかり3人の親が心配し

て迎えに来るまでなかなか決まらなかったが、3つのことが決まった

- 1 キャンプをする
- 2 海水浴に行く
- 3 遊園地に行く

第1部・第4話 夏休み（キャンプ）

夏休みに入って3日後の7月23日に少年探偵団として初の旅行になる

それはキャンプである

3人はキャンプをものすごく楽しみにしていきまかと思いつながら、後部座席ではしゃいでいた

コナンは助手席ですでに眠りについていたのであった

その姿を歩美が見つけて声をかけたが博士に止められてしまった

その後、車に揺られて2時間後に目的地のキャンプ場に着いた

後部座席に乗っていた3人は勢い良く降りると荷物を持たずに行くこととしたがコナンに止められてしまった

「おーい、お前ら荷物持てよ？」

「……あつ！そうか」「」

3人の声が重なった

全員で荷物を持ち、大きな木の下に左右1カ所にテントを張ることになったため、3人と2人に分かれることになり話し合うことに決めた

「歩美はコナン君と2人でテントに入る！」
言いながらコナンに抱きついた

「あつ！ダメですよ歩美ちゃん！」

「そうだが、歩美」

「えー、なんで？歩美とコナン君が一緒だと2人はイヤなの？」

「あ、当たり前ですよ!」

「そ、そうだぜ歩美!」

「えー、博士はどう思う?」

「ワシ?」

光彦と元太はコナンと歩美が一緒になることを必死で阻止しようとして歩美に食いかかった

しかし、歩美はコナンと一緒にいいと負けじと食らいつき最後に博士に任せた

ふられた博士は驚いた顔をしてしまった

その後しばらく言い合っていたが、最後に初めてコナンが口を開いて「歩美がいいなら」と言ったことが決め手になった

その言葉に歩美は大喜びをして再びコナンに抱きついたが、光彦と元太は再び怒りと嫉妬心を心に溜め込み抑えていた

その後、テントを張り付けると3人は一斉に遊びに出かけていってしまい、コナンと博士は呆れてしまっしかなかった

「あいつら、やったらすぐに遊びに行くな」

「そうじゃな、遊び盛りだからな」

「そうだな、俺もあいつらの時には遊びばかりしてたしな」

「確かにそうじゃったな」

2人は昔のことを歩美達に照らしあわしていた

その後3人はコナンを連れて行き、魚釣りに探検・サバイバルかくれんぼなどをして、思いつき遊びまくったがまだ遊び足りない3人にコナンは、ただ啞然とするしかなかった

一方では、博士が1人で夕食を作り始めていた

「しかし、新一達は遅いのう?」

博士は子供達がなかなか帰ってこないことを心配していた
すると、遠くから子供達の声が聞こえてきた

「はーかーせー!」

「博士遅くなりました!」

「博士腹減ったぜ!」

「おい、お前ら待てよ」

子供達の声の聞くと博士も一言返した

「君達ワシは心配してたぞ!」

3人は目の前の料理に釘付けになり、コナンのことを忘れていた

その後、全員で遅めの夕食を食べてキャンプ場に設置してある混浴
露天風呂に全員で入ると、光彦と元太は周りの大人の女性の裸を見
て顔を赤くして、鼻血まで出してしまいちよつとした騒ぎを起こし
周りに迷惑をかけてしまった

夜9時になり、全員はテントに入り翌日に備える

博士・元太・光彦のテント

「博士、混浴なんて聞いてませんよ!」
「そうだが、なんで混浴しかないんだ?」
「すまんすまん、ワシもつい確認するのを忘れてたんじゃ」
「そうゆうことはしっかり確認してくださいよ?」
「確認しっかりしろよな?」
「ああ、わかつたわい」

2人は博士に言いたいことを言っつてスッキリしたのか、すぐに寝てしまった

一方、コナンと歩美のテントでは……

「コナン君? 私達と遊ぶのイヤ?」

「……………」

「ねえ? コナン君聞ってるの?」

「……………」

「なんで、歩美の聞くこと無視するの?」

「無視誰が?」

「コナン君だよ!」

「えっ?」

コナンは歩美が聞いてきたことすら、耳に届いてなかったため、歩美に自分って言われたときには驚きを隠せなかった

コナンは歩美に言われたことで自分の行った行為に少し反省をした

「ごめん歩美、聞いてなかった」

「最低！コナン君！」

「歩美……」

「コナン君なんて知らない！」

「……………」

コナンは歩美を怒らせてしまい、歩美はコナンから離れてすぐに寝てしまった

(キャンプ翌日は省く)

この事が幸いしてかキャンプ後、元太や光彦からものけ者扱いをされてしまった

歩美はそれ以来コナンに関わることをしなくなった

コナンもいつも通りに過ごしていた

2人が再び歩み寄ることはあるのだろうか……………

第1部・第5話 重たい空気の新学期

キャンプでの出来事以来4人で遊ぶこともないが、博士だけを連れだつてコナンを除く3人で遊ぶ時間が増えてきた

その間のコナンは、蘭や園子達と遊ぶ日々が増えてきていた
その事が気になっていた博士と蘭や園子はコナンではなく、歩美達に聞くことにした

しかし、歩美達に聞いてもなかなか答えられなかった
その事を歩美達は言わないまま、新学期を迎えた

始業式の日の朝、歩美達はコナンとは一緒に学校へ向かうことをしなかった

コナンは、歩美達よりも遅くに登校して遅刻ギリギリに学校へ着いた
しかし、4人の間にある微妙な雰囲気クラスメート達は近寄れないでいた

担任教師も同じように、声をかけづらそうにしていた
特に、歩美達3人が一方的にただならぬ雰囲気を出していた
そのため、ただ見守ることしかできなかった

4人の微妙な雰囲気は下校まで続き、そのクラスでは重たい空気の中にいて精神的に疲れた児童がほぼ全員だった

新学期になつたのにも関わらず、4人の微妙な雰囲気のためになかなか授業が進まなかった

教師も腰を抜かしてしまうほどの雰囲気だったことが分かる

歩美達3人は放課後に歩美のマンションに行き、コナンとの亀裂をどう埋めるかを話し合うことにした。

第1部・第6話 亀裂の原因

新学期初日の放課後に3人は歩美のマンションに行き、コナンとの亀裂解消について話し合うことにした

亀裂解消案を考えることにした3人だが、なかなか切り出すことが出来ずにいた

そのまま、なにも話すことなく3人は別れた

途中で帰ってきた歩美のお母さんは元太と光彦が帰った後、歩美に話し合っていたことを聞いてみた

「歩美、もしかしてまだコナン君と仲直りしてないの？」

「えっ？」

「だって、今日元太君達とコナン君との仲直りの為の話をしていたんでしょ？」

「お母さん……」

歩美は母親にはバレている事に気づき、原因を母親に話すことにした

「実はね、キャンプの初日の夜にコナン君と2人つきりだったの」

「それで？」

「私が話しかけているのに、コナン君全然話聞いてくれなかったの！」

「原因はそれなの？」

「うん……」

「そう」

歩美のお母さんはそれだけを聞くと、追求することもなく、ただ静

かに頷き歩美に一言言いました

「あのね、歩美。この事はコナン君も悩んでいると思うよ?」

「えっ?」

その一言だけを言うと、お母さんは夕食の支度に取りかかり、歩美はそのお母さんの一言を一晚中考えたが結局分からないまま1日が終わってしまった

第1部・第7話 コナンの悩み

歩美が怒っている原因は自分にあると分かっていたが、アイツら2人が歩美を守るうとする雰囲気には圧倒されてしまった

コナンは歩美にどうやって謝ろうかと考えていたが、なかなか思いつかないでいた

それと同時に、歩美からも避けられていたため、余計に切り出すことが出来ないでいる

その様子を陰から見ている、蘭はコナンに何か言おうとしたが、あえてなにも言わないでいた

(コナン君……新一の小さい頃に似ている)

蘭は今のコナンが行方不明の新一の小さい頃の悩みを抱えている姿に似ていたので、確信ではないが新一だと思ってしまうが、静かにその場を離れた

結局、コナンは歩美にどうやって謝ろうか悩んだが、いい考えが思い浮かばなかった

(歩美に謝ろうと考えているが、あの2人が邪魔しそうだな。どうやって歩美を誘いだそうかな)

第1部・第8話 謝罪

2人の悩みから約3日後の金曜日を迎えて、コナンはクラスメートの女の子に歩美だけを連れてくるように頼んだ

頼まれた女の子はコナンに頼まれたように歩美だけに事情を伝えた歩美は放課後にコナンから話があると聞かされ、歩美はコナンが謝ってくることを伝えてくれると納得した歩美自身も謝ることを伝えることにした

放課後になると、歩美はコナンの姿を探したがすでにいなくなっていた

そのため、急いで呼ばれた場所に行くと、すでに待っていた歩美はゆっくりとコナンの方へ歩いていき、前にたつと歩美はコナンに声をかけた

「…………コナン…くん？」

「えっ？」

「話って何かな？」

「ああ、歩美に謝らなければならないんだ」

「…………うん…………」

歩美が頷いてから沈黙が続き、ゆっくりとコナンが口を開いた

「…ごめん」

「……………」

「キャンプの時にぼーとしてしまっでごめん」

「……………」

「あの時は退屈しのぎに少し寝てたんだ」

「えっ、寝てたの？」

「ああ」

歩美はコナンの答えに大きく落胆してしまった

「ごめんな、歩美」

「ううん、私もごめんねえ？」

「ああ、いいよ」

「ありがとう！」

2人の仲は元に戻ったが、元太と光彦はいまだにあの時のことを怒っていた

しかし、歩美にコナンから謝ってきたと言われては2人は歩美に逆らえないため、渋々納得した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6699r/>

コナン×歩美 物語

2011年10月21日08時06分発行